

# 博学連携の試み—日本史推進委員会の取り組み—

鎌倉学園高校 風間 洋 足柄高校 桐生 海正 神奈川総合産業高校 高橋 俊介  
はじめに

神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会日本史推進委員会(以下、委員会)では、新歴史科目「歴史総合」「日本史探究」の特性が、生徒が主体となって歴史資料の読解を中心とした科目であることを踏まえ、高校歴史教育と博物館との連携の有効性を模索してきた。本稿はその経過・実践報告である。最初に風間から委員会による近年の連携の経過報告を、次いで桐生海正より具体的な実践報告、最後に高橋俊介より連携事業についての課題・今後の展望を報告する。ちなみに今回の意見や提言は発表者各個人の見解によるもので、委員会メンバーの総意ではないことをあらかじめお断りしておく。

## 1 委員会の取り組みの経過

風間 洋

神奈川県立歴史博物館(以下、県博)の統計(2018年度)によれば、県内の高校教員・生徒の利用は小中学校に比べ極めて低い。来館目的も遠足などの学校行事や総合学習での利用は5校、社会科教科学習として利用した高校は0であった。こうした背景には、「授業時間が不足する」「学校行事と折り合わない」「学習効果が期待できない」等の理由が上位に挙げられている。過去の本委員会の例会活動でも歴史教育における博物館学習の有効性を認めながら、県博を中心に年一回程度、特別展を観覧する程度にとどまっていた。実際の歴史資料が語り掛ける圧倒的な迫力を感じることは出来たが、一過性の行事となってしまう、博物館との継続的な連携には至らなかった。一方の博物館側も小中学生向けの教材開発や出前授業の実績は多いものの、高校に対応する教材開発は立ち遅れていた。

2022年度より導入された新科目「歴史総合」「日本史(世界史)探究」では、生徒自身が探究テーマを設定し、問いを立て資料を読み取り、表現することが目指されている。新学習指導要領でも、「…資料を積極的に活用し、文化遺産、博物館や公文書館、その他の資料館などを調査・見学したりするなど、具体的に学ぶように指導を工夫…」「その際、歴史に関わる諸資料を整理・保存することの意味や意義に気付くようにすること。また、科目の内容に関係する専門家や関係諸機関などとの円滑な連携・協働を図り、社会との関りを意識した指導を工夫すること。」「活用する資料の選択に際しては、生徒の興味・関心、学校や地域の実態などに十分配慮して行うこと。(下線部は新指導要領から新たに追加された部分)」とある。このように「歴史総合」「日本史探究」科目の特質は、博物館などの資料所蔵機関との親和性は極めて高いといえよう。そこで本委員会では、県内資料を広く所蔵し、古代～現代・民俗の各分野の学芸員や企画普及担当の専門員等、充実した専門家を配する県博を連携の主体に据え、2020年度から本格的に年間行事に組み込んで活動を進めてきた。その実践として以下の3つの形式が挙げられよう。

### I. 教員のレポートに対して学芸員の助言・コメント、事後懇談会…2021年3月3日例会

新谷桂氏(希望ヶ丘)報告「『樺太』を教える」に対し、北方史の研究者で特別展「北からの開国」の展示担当をされた嶋村元宏学芸員から関連資料の所在や助言を得ることが出来た。専門家である学芸員から助言を得る、これは博物館で例会を実施する最大のメリットの一つである。事後の懇談会では、教員側のニーズ(単元教材となりそうな地域資料の提供や助言、県博の開館時間を延長等)、高校生のニーズ(探究テーマの設定や調査・研究方法の相談)、博物館のニーズ(教員・生徒利用の増加、新科目の内容把握、博物館の高校生向け教材や催事に活用等)と、それぞれの立場からの忌憚ない意見交換ができた。何

より学芸員との人的交流ができたことが最大の成果で、以後県博・委員会双方の恒常的な連絡窓口が開設され、年3回ほどの合同例会実施が軌道に乗ることとなった。同形式で2022年10月19日の例会も特別展「永福寺と鎌倉御家人」の展示見学・レポート・懇談会を実施。

## II. 教員(歴史教育)・学芸員(歴史学)が共通テーマで各レポート…2021年7月7日例会

桐生海正氏(足柄)と渡邊浩貴学芸員が事前に打ち合わせ、「地域の中世」を共通テーマとして報告した。文献が乏しい学校周辺の中世史を調べる際でも、城跡や石造物・古地図、地名や古老の聞き取り調査などをすることで地域の中世の復元は可能であるという実践報告で、両報告を基に文献以外の資料の有効性と限界について活発な討論がなされた。2022年5月18日例会でも桐生氏と梯学芸員が古地図や古文書を用いた報告を実施。具体的な実践内容は次節を参照。

## III. 学芸員の支援を得た高校生の自主的な探求学習…2021年10月27日例会

井上渚沙氏(大磯)による勤務校の生徒による地域の探究学習の実践が報告された。興味を持った県博の展示資料の中からテーマを設定し、研究・調査方法の指導、成果のオンライン発表まで、生徒が一貫して丹治雄一学芸員の指導を受けながら進めた点に大きな特色がある。最終的には学園祭などで探究成果を展示発表し、学芸員に講評を受けるところまで連携を計画していたが、残念ながらコロナ禍のために中断してしまった。この試みは継続していくという。県博側も初めての試みであり、実践校を増やしたい考えである。

## IV. 学芸員と教員の協業による教材化…2022年3月2日例会

昭和初期の時代背景を考える地域資料として、武田周一郎学芸員から県博所蔵の1932年発行の「神奈川鳥観図」の提供と助言を受けた本田六朗氏(横浜緑園)による教材案が報告された。制作意図や描かれている内容の分析、時代背景の考察、現在との比較など、生徒に注目して欲しいポイントをまとめたものである。教員が単元に相応しい資料の搜索を相談し、学芸員が適切な資料を提案して助言、教材化したところが画期的であった。報告後、鳥観図を別室にて実見し、地域教材としての有効性が活発に討論された。2023年3月1日の例会でも本田氏と武田学芸員の協業で、大衆化の単元授業のため、館所蔵の戦前のオートバイ雑誌や冷蔵庫を教材化した報告がなされた。

## 附. 懇談の中から生まれた高校生向け催事…2022年8月18・19日

桑山童奈学芸員の「高校生に浮世絵を材料にミニゼミを開催したい」という提案で、高校生向け連続講座「浮世絵に親しむ」が実現した。本学生徒が参加し、幕末期の浮世絵を題材に基礎知識の講座～浮世絵の実見・観察～時代背景の読み取りや問いを立てて討論する等、「歴史総合」の要素を多分に盛り込んだ内容であった。県博側も高校生向け講座は初の試みだったが、教員の助言を受けながら講座内容を改善して継続予定だという。

## 若干の所感 博物館を展示見学・学校行事の利用から教材開発・研究の場へ

新科目の授業準備として、教材となる適切な歴史資料の選択・精選作業は一層重要となっていくと思われるが、全時代の単元において適切な歴史資料を選択できる教員など皆無であろう。同時に各生徒から出される多種多様な探究テーマに対し、一教員がその全てに専門的なレファレンスを行うのも限界がある。こうした教員の負担軽減のためにも地域資料を多数所蔵する博物館、その資料の研究者である学芸員を良い意味で「利用」することは有効であろう。博物館が展覧会見学や学校行事の利用だけでなく、教科研究や教材開発の場として教師・生徒に広く活用されることを期待する。…後述の高橋報告参照

《主な参考文献》 神奈川県立歴史博物館ホームページ 加藤公明「歴博の教育的活用を求めて」『歴史評論』451(1987)、小貫充「学校教育と歴史系博物館をめぐる」『ヒストリア』167(1999)、吉村健「日本史学習における博物館の活用」『考古学研究』183(1999)、會田康範ほか「高校「総合」における博学連携の試み」『歴史地理教育』695・705(2006)、百濟正人「地域連携と課題研究の取り組みについて」『史料ネットNews Letter』94(2020)等

## はじめに

高校教員が日常の業務の中で、博物館を利用する機会はそれほど多くないと感じている。利用する機会があったとしても、それは出張講座や遠足など限られたイベント的な利用に留まっているのではないかと。私もその一人であった。一方、「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」が始まり、従来よりも教員には幅広く諸資料を扱う能力が必要となってきた。また、学習指導要領では生徒が問いを表現し、課題を追究したり解決したりする活動が求められている。そうした中で、博物館は新科目との親和性が高い施設といえるだろう。ここでは博物館との継続的かつ持続可能な連携を見据え、具体的な取り組みを紹介したい。

## I. 日本史研究推進委員会での取り組み

日本史研究推進委員会では、2020年度末から神奈川県立歴史博物館との連携を開始した。これまでの蓄積は【表1】の通りである。

I 展示見学			
日付	展示タイトル他		
2021年3月3日	令和2年度 かながわの遺跡展「相模川 遺跡紀行～3万年のものがたり～」		
2021年10月27日	開基500年記念 早雲寺～戦国大名北条氏の遺産と系譜～		
2022年3月2日	常設展示、「神奈川県鳥獣図」の見学		
2022年10月19日	源頼朝が愛した幻の大寺院永福寺と鎌倉御家人一荘殿される鎌倉幕府とその広がり		
2023年3月1日	松平遠道助江戸在勤日記～武士の絵日記～		
II 教材開発			
日付	発表者・発表タイトル	備考	会場
2021年3月3日	新谷桂「『樺太』を教える」	コメント：嶋村元宏学芸員	神奈川県立歴史博物館
2021年7月7日	桐生海正「校外学習で深める地域史学習～とくに河村城址周辺を中心に～」	コメント：渡邊浩貴学芸員	県立希望ヶ丘高校
	渡邊浩貴「地名・聞き書き・景観に探る中世武士の本拠～鳥根県益田市の現地調査実践から～」		
2022年3月2日	本田六朗「神奈川県鳥獣図を通して考える昭和初期」	武田周一郎学芸員と連携	神奈川県立歴史博物館
2022年5月18日	桐生海正「戦国期山城の教材化～松田城から深める～」	コメント：梯弘人学芸員	県立希望ヶ丘高校
	梯弘人「掃源院文書からみた戦国時代～小田原北条氏と鎌倉～」		
2022年3月1日	本田六朗「歴史総合で『大衆化と私たち』をどう教えるか～博学連携の視点から～」	武田周一郎学芸員と連携	神奈川県立歴史博物館
III 研究指導			
日付	発表者・発表タイトル	備考	会場
2021年10月27日	井上渚沙「歴史探究学習と博学連携に関する実践報告（中間報告）」	丹治謙一学芸員と連携	神奈川県立歴史博物館
IV 高校生向け連続講座			
日付	講座タイトル	備考	会場
2022年8月18～19日	浮世絵に親しむ	担当：森山童奈学芸員	神奈川県立歴史博物館

「I 展示見学」では、展示を通して、教員が最新の研究成果を知り、学芸員による解説を受けることで、深い知見を身に付けることができた。「II 教材開発」では、教員の発表に対し、学芸員にコメントをいただき、よりよい教材開発に努めた（後述）。学芸員と連携を密にし、博物館の資料を用いた教材開発をおこなった事例もある。「III 研究指導」は、自主的な高校生の探究活動を博物館側がサポート

した実践である。「IV 高校生向け連続講座」は、博物館側からのアプローチで、夏休みに高校生対象に資料を読み解く連続講座が実施された。連携を進める中で、このようにいくつかの方向性がみられるようになってきた。

## II. 私の実践事例（主に【表1】のII、IIIに該当）

以下、私がおこなった博学連携の実践事例を①から④に分けて紹介したい。

①2021年7月7日（水）におこなった研究報告「校外学習で深める地域史学習～とくに河村城址周辺を中心に～」では、2021年5月に実施した河村城址への校外学習を切り口に、中世地名から歴史を考える教材開発の事例を紹介した〔拙稿 a〕。報告に対して渡邊浩貴学芸員からコメントをいただいた。この後の展開として、2021年8月5日（木）に渡邊学芸員による講話「日本中世史における現地調査事始～フィールドに出かけよう！～」を足柄高校で実施し、歴史研究同好会の生徒や職員が参加した〔拙稿 b〕。今後、渡邊学芸員と合

同で河村城下の調査を実施し、その成果を博物館展示につなげていければと考えている。

②2022年5月18日(水)におこなった研究報告「戦国期山城の教材化—松田城から深める—」では、松田城を事例に、教材開発に取り組んだ。教材化は「授業で山城を教える必要はあるのか」という素朴な疑問からはじまった。研究を深めるうちに、「中世＝戦争・乱世」の時代、「近世＝平和」の時代であったと考え、山城こそ中世・近世の転換を見通せる格好の素材ではないかと気づいた。報告に対して梯弘人学芸員からコメントをいただき、(1)近世に「古城」が書き上げられた意味、(2)松田城主であった松田新次郎康隆の系譜、(3)北条氏の支城配置における松田城の位置などについて議論を深めることができた。

③次に部活動での連携事例を紹介する。私が顧問を務める歴史研究部の生徒が、関東大震災に関する研究レポートを執筆する過程で、聞き取り調査の中で新出資料(関東大震災で亡くなった方の葬儀の写真や観音経)を発見した。そこで、2022年10月20日(木)に地元の南足柄市郷土資料館を訪問した。飯岡葉子学芸員に調査結果を報告すると、見つけた資料は大変貴重なもので、戦前に南足柄には写真館がなかったため、松田や小田原などから写真屋を呼び、撮影したのではないかとご教示いただいた。また、2022年12月27日(火)には、神奈川県立歴史博物館で明治大学附属明治高校・中学校歴史研究部と足柄高校歴史研究部の「歴史研究部研究交流会」を実施した。数グループずつ研究発表をおこない、武田周一郎学芸員からコメントをいただいた。生徒は専門的な見地からの意見を受け、自身の研究をブラッシュアップさせることにつながったようである。

④過去の実践として、平塚市博物館で日本史研究部の研究成果を展示したこともあった(2016～2019年、計4回実施)[拙稿c]。早田旅人学芸員には、展示に際して専門的な指導を受けた。博物館のバックヤードを見学させていただいたことをはじめ、このような経験は生徒の進路選択にも大きな影響を及ぼしたようである。

## おわりに

上記①・②の実践事例からは、教員が開発した教材に対して学芸員からコメントをいただくことで、教材をより深化させることができるという方向性をみいだせた。とくに「日本史探究」では、学習指導要領にも「地域社会の歴史と文化について扱うようにする」とあることなどを踏まえると、地域史という身近な題材を教材化することは有効であると考えられる。そのため、地域史それ自体を教員が深めておく必要がある。その点で、地域の学芸員は「身近な」エキスパートであり、今後も対話や連携の必要性が感じられた。

③・④の実践事例では、生徒が探究学習の中で専門的な知見を学芸員から得た事例を紹介した。教員の指導にもある程度の限界性がある中で、探究学習をおこなう際、博物館はそれを支えてくれる施設の一つとなり得る。普段の授業でどこまで普遍性や汎用性を持たせられるのかという課題はありつつも、今後も試行錯誤をしながら博学連携の実践知を積み重ねていきたい。

## 〈参考文献〉

- 拙稿 a 「校外学習で深める地域史—地名から歴史を探る—」(社会科部会歴史分科会『研究報告』第50号、2022年)。  
拙稿 b 「高校生が取り組む地域史研究—歴史研究同好会の試み—」(『地方史研究』第415号、2022年)。  
拙稿 c 「高等学校における地域史研究の実践—日本史研究部の活動を事例に—」(『日本史攷究』第43号、2019年)。

### 3 展望と課題

高橋 俊介

日本史研究推進委員会における博学連携の実践について、①展覧会の展示解説、②教材開発を専門研究者との連携でブラッシュアップ、③博学連携による高校生の学習指導、と大きく3つの内容に分けて展望と課題を述べたい。

最初に①については、日本史研究推進委員会では年に2回ほど、月例会を神奈川県立歴史博物館（以下、県博）で実施して、会期中の展覧会を見学させていただいている。その際に、学芸員など展示担当者に展示解説を依頼している（なお、鎌倉国宝館や鎌倉歴史文化交流館の見学でも依頼）。専門家である学芸員から、展覧会の企画意図や展示構成、展示資料の解釈などを解説してもらい、教材化できるネタはないか、この歴史資料をもとに「問い」を作れないか考えを巡らせることができる。2022年度の特別展「源頼朝が愛した幻の大寺院 永福寺と鎌倉御家人」では、展示担当の渡邊浩貴学芸員から、平泉藤原氏の影響を受けて鎌倉に作られた永福寺が鎌倉に浄土世界を体現したこと、幕府が支配の正当性を文化的側面から見せつけたことを明快に解説していただいた。こうした刺激的なレクチャーを受けた教員が勤務校の授業で紹介し、さらには教材化していくことが期待される。今後は学芸員と展覧会をいかした教材研究も進めていきたい。そして、このような有意義で貴重な研修会を全県にいる多くの教員にも拓かれたものにするために、東京国立博物館で行われている教員研修をモデルとして企画されることを期待する。博物館という施設は地域資料の宝庫でもあるし、県博以外にも市町村には博物館や資料館がある。地域の施設を活用し、その常設展（県博は2019年に常設展の展示替えをした）や所蔵資料を用いて、地域史の視点から「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」の授業づくりを進めたい。

次に②については、日本史研究推進委員会の月例会で委員が報告しているレポートを学芸員にも聞いてもらい、専門的な立場からコメントをいただいて、教材のブラッシュアップにつなげている。本田六朗氏（横浜緑園）の取り組みは、学習テーマに合わせて学芸員から資料の提案と助言を受けて教材化を進められた。今後もこうした教員と学芸員との協働を活発に進めて、「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」の教材や授業づくりを進めたい。一方で、実物資料を学校に持ち出すことの困難さや学習テーマに近い資料がどの博物館にも必ず所蔵されているとは限らないことには注意が必要である。

そして③については、井上渚沙氏（大磯）が博学連携による探究学習の実践を進められた。詳細は社会科部会歴史分科会『研究報告』第50号を参照されたい。また、2023年度の社会科部会春季研究大会で取り組みの続報について報告される予定である。課題となるのは、対象生徒が有志や部活動など少数に限られてしまうこと、スケジュール調整の難しさ、高校生が博物館まで何度か通う必要があることである。より多くの高校生に博学連携を還元するためには高校生対象の講座や展示解説会などを開催などであれば全県の高校生を対象とすることができる。ただ主体的に参加することへのハードルは高いだろう。

最後に高校生の博物館利用拡大に向けて、日本史研究推進委員会で取り組みそうなことを構想したい。個人的には、毎年夏に開催している日本史サマーセミナーのような企画を博物館でも実施できないものかと考えている。午前中は所蔵資料や展覧会をもとに、学芸員の講義、午後は学芸員から展覧会や常設展の解説をしてもらう企画である。学習指導要領にあるように、高校生が「実物や複製品などの資料と接して、具体的で多様な情報を得て歴史の考察を深め」られる機会をつくるのである。日本史研究推進委員会ではこうした①～③の取り組みを、より多くの先生方にも加わっていただいで進めていきたい。